

『教育手帖』一九五〇年二月号（日本書籍）

カリキュラム盛衰記

矢口 新

カリキュラム盛衰記を書けと言われて、実は閉口してしまつた。カリキュラムはまだそんなことを書かれる所まで行つていない。盛になつたことはてんでありはしないし、従つて衰えたことももちろんない。否日本のカリキュラムは全体として古井戸の水の如くよどんでいるにすぎない。時々底の方からガスが発散して水面にアブクの如き存在が見られるが、要するに水泡にすぎない。もつと底の方から毒気が発散されなくては、この溜り水は中々新しくなるまい。こういったのが日本のカリキュラムの現状だと思う。これは先生方にお叱りを受けることを覚悟して申し上げるところである。

ある口の悪いのが、近頃の先生はカリキュラムは研究しているけれど教育は勉強してないといった。全くカリキュラムはここ二年間というものの、先生方の青い鳥となつたのである。カリキュラムがわからないうでは先生がつとまらないと、この青い鳥を求めて狂奔しているのである。さてこの青い鳥はどこに居るのやら、片山さんのようにうまくつかまるかしら。

カリキュラムで一財産をつくつたアバーン・アプレ・ゲールの学者もたくさん居るとかいふ。由来、この国の学者といふのは拡声機たる

ことを以て任じている。ドイツの何某氏曰く、アメリカの誰々氏曰くで八十年来飯を食つた伝統がある。否、孔孟の道をひたすら身に体して山崎暗斎をして皮肉らしめた光榮ある（？）伝統の中の学者である。数えれば数世紀にならう。ルイセンコ学説ではないが、学説紹介が遺伝質となつているのである。青い鳥をどこに発見してくれるか。チルル、ミチルの話を知つて居られる方々であれば安心である。

敗戦という天の時、日本という地の利、学者と教育実家の人の和を得て、カリキュラムを求めて、さまよいあるく人がここにウヨウヨと出現したわけである。

今から満二年半前に話がさかのぼるが、二十二年の四月頃に、恐らく日本で最初の地域プランらしいものとして社会科の川ロプランが発表されたものである。時の市の助役は今を時めく梅根教授であつて、氏の仲介の労により、中央教育研究所と川口市の教育実家との緊密な協力が行われて、全く独自の地域プランが出来上つた。当時、市全体の教育者の協力体制もスムーズであつて、学校個人主義の強い教育家にはめずらしいものとされ、将来の方向に示唆を与えたものであつた。研究者と実家の協力、実家の団結、地域の現実に立つカリキュラムという主張、地域社会の一般市民の協力等々、当時漸く廢虚から立ち上ろうとする日本の雰囲氣を代表して、多くの人々の共感を得たものであつた。

当時この案は文部省の人々からは多少白眼視されたところもあつて、このプランの理論を代表する中研の人々は野党派と称されたものである。かく申す筆者も野党派といわれたおぼえが一度ならずある。

このプランの欠陥は児童の心理性をとらえてゆくことが乏しいところにあつて、これをいかにするかが大きな課題となつていた。その

結論はこのプランの実施途上において児童の具体的な心理性を把握することにありとされた。その後三年になんなんとして今、川口市が往年の覇気を保持するとせば、もうそろそろ改訂の案が出現してよいころである。そうして、社会科のみならず、その他の教科に対する実質的、現実的研究がみられるころといふべきであろう。果して今研究家と実家の協力、実家の団結、市民の協力、現実研究に立つ計画等が行われる雰囲気が残っているか、天下の刮目しているところであろう。

この頃はまだカリキュラムという語は、今のように普及していなかった。教育界の雰囲気は方法論にあった。むしろテクニクといった方がよいかも知れない。討議法などというものが強く教育者の頭を支配していたのである。その行きすぎは是正された。そして川口プランを契機として教育の現実的研究も漸く出発するかに見えた。

好事魔なし。おつとこれは失言だが、幸福に(?)誠になんかな、この頃からアメリカの資料が多く日本に入り出したのである。これから約一年、アメリカの資料の研究が多くの学者によって、また文部省を通ずる占領当局の紹介によって、日本の全体に浸透し出したのである。これは極めてよいことであつたが。

問題は日本の側にあつた。第一に教育の現実研究の地盤の上にカリキュラムが徐々に生み出されるべきだといふ考え方をもたなかったこと、従つて第二に出来上つた形だけが眼についたこと。言いかえればアメリカは、カリキュラム研究が始つて——といつてもこれは決して形の研究でない現実の反省を一步一步進めて行く研究である、——すでに四十年になんなんとしている。このギャップを無視して出来上つたものにいきなりとびついたことである。まあそれもよい、しかし

今迄竹槍であつたものが、急にB二九は作れないではないか、このエネルギーを養うことを度外視して木製B二九を製することは無意味ではないか。日本の悲しい運命は、カリキュラムの研究が、この木製か竹製のB二九をつくることに走つてしまったことである。もつとも竹のカーテンという言葉もあるから、これは後進国の特色かも知れない。

この頃『社会科教育』という雑誌が忽ちの中に販路を拡張して、功多くまた罪少からざるものがあつたといえよう。これは何も編集長山崎氏のことを言っているのではない。氏は極めてすぐれたジャーナリストとして筆者の敬服する人であるが、氏の善意に拘らず、現実には中々思うようにならない。時の流れといふか、人の流れといふか、恐ろしいものである。

二十二年から、二十三年の上半期へかけては、北條プラン、福沢プラン、東京高師、東京第一師のプラン等が出現したことは既に先刻読者の御存じのところであろう。

またこの頃梅根教授の『新教育への道』なる名著が出て、多くの人々がむさぼり読んだことも注目すべき点である。中央教育研究所の『社会科概論』は功罪相半ばするもの、倉沢剛氏の『社会科の根本問題』はアメリカの動向を紹介したもの、何れもかなり広く読まれたものである。

さてこの辺からカリキュラム後期に入る。さてポツポツ、コア・カリキュラムという声が聞え出したのである。二十三年下半期から二十四年の間である。この間に発行されたカリキュラムと名のつく書物が筆者の所だけを見ても七十数冊ある。恐らく百を超えること遙かである。恐ろしい隆盛(?)である。わが世の春といいたいところであ

ろう。カリキュラムなるものにて瞑すべし。ラジオの日曜娯楽版にもうたわれ、新聞や総合雑誌に解説がのる程栄えたのである。まさに天下の壯観、奇観。

二十四年はコア・カリキュラムの年であるといつても誰も不平は言わまい。日本全土がそうだったという意味ではない。むしろ極く一部の現象といつてよからう。しかしである、コア・カリキュラムにあらずんばカリキュラムにあらずという雰囲気を作ったことこそ、さまざまな意味で特筆大書さるべきである。更にコア・カリキュラムをめぐって様々な問題が発生している。例えばであるが、文部省の多くの事務官諸氏がこれに反対の意向を表明したこと——『社会科教育』の何月号だかを見られよ、また梅根、長坂両氏の雑誌『カリキュラム』に於ける批判及批判的書信の公開——或は宮原誠一氏、矢川氏らによる多くの批判論等々、筆者は世間知らずでこの辺の事情にうといのであるが、それでもいろいろな雑音が耳に入る。

コア・カリキュラム連盟が成立したのは、多分二十三年末だったと思うが、ここに至るには数ヶ月の準備が行われていたであろう、政治的(?)にもまた、研究としても、北條校、明石附属、新潟一師附属、桜田校等、機を見るに敏なる最も優秀な実家が熱心にこれを支持したことは、この連盟をして、二十四年末に至つて連盟会館の設立を宣言させるに至っている。まさに破天荒である。この熱情が失われぬならば、また何等から歴史のページをつくることは間違あるまい。

更にこの運動を推進するに力を致したものの、否そのエネルギーそのものといつてよいものに、倉沢、梅根両氏のそれぞれの名著があることも既に先刻御承知のはず、蛇足までに加えるならば、『近代カリキュラム』と『コア・カリキュラム』である。発行部数十万をこえた

いわれているこれらの有名著述が、それだけ読まれた事だけでも、既にタマゲル価値のある出来事である。文字通りこれこそ有名な著である。

これだけコア・カリキュラム運動が進展すれば、そこに様々な靴音(?)が起るのは当然である。面白いのは、この運動が、いわゆる保守派といわれる文部省関係の人々から、とかく積極的支持を受けていないこと、一方進歩的といわれる人々の間にも必ずしも支持者ばかりでないことであろう。あたかも往年の自由主義者の如く、右と左との挟撃にあつているかの如き観を呈しているのは、何かを考えさせるものがある。

巷のすずめたちは、相撲の見物でもする如く、——それだけ人氣が出たのは誠に結構なことですぞ——いろいろなことをさえずる。コア・カリキュラムとその反対者とは、或は教育大学と東大とのグループに分けられたりもしているらしい。前者がプログレシヴィストで、後者がエッセンシヤリストだ等と書いたものを読んだ記憶もあるが、そんなことをコア・カリキュラム連盟の人達がいうはずはないから、さてさて世の中は面白いものである。

最近地方へ行つたとき、CIEのオズボーン氏がカリキュラムの問題について語つた内容をたまたま見せられたが、この文書を或る所では広く公表し、或る所では公表していないということを聞いた。その公表しない理由はカリキュラムの研究熱がさめるといけないからだというのであるが、あれにはそんな熱のさめることは書いてない。むしろもつとより積極的に現実的研究をすすめたものであった。

これを逆にとつたというのはどうだろうか。コア・カリキュラムはそんな浅いものではない筈だと思つたが、地方に於ては、コ

ア・カリキュラムの真意はまだ伝わっていない様なところもあるらしい。

誠文堂の出している連盟機関紙『カリキュラム』あたりは、こういう問題についてもっと真剣な啓蒙をしてもらいたいものである。

そろそろ予定の紙数がきれそうになって来たのだが、さて、コア・カリキュラムで日本の現実はどれ程動いたか、これは何人も公平に見て一つの胎動にすぎないであろう。鬼が出るか蛇が出るかは実は今後の問題であろう。コア・カリキュラムが、かの戦時中の教科の統合の如く、今迄の教科、特に教科書教材の組合せや、連絡統合であったならば、ただ形だけを問題にしていることになるであろう。問題は、コアなるものにしても、周辺にしても、現実の生活内容から、必然的に生み出されて来たものでなければならぬはずである。形態でなくして実質をこそ問題にするはずであろう。その点でこの運動はどれだけのものを積み上げたか。頭の中のコアの制作でなく、生活からの必然的な表現としての経験内容、教材がどこまでつくられたか。

地域プランの推進ということもまた新しい問題になっている。これもまたカリキュラム問題の最初からの理念であり、問題であった。これも、解決していかないものである。

現実の生活から具体的な教材を、或は経験内容を生み出す実際の研究、これもまだ何等解決していないわけである。

ここに立ってはじめて述べたことが再び考え出される。筆者はここでこういいたい。

カリキュラム盛衰記はまだ書けないではありませんか。当初出発の時にもった問題がまだ何一つ目鼻がついていないのです。

それでは終戦後五年間何をして来たか、そういわれても困るのであ

る。世の中の現実というものはそう、一年や二年でかわるものではないのである。まだまだこれからが本当の苦心をするところだということになりそうだ。

奈良女高師附属の「たしかな教育」ということを考える意図もそこにあつたといえようが、これも考えることややすく、行うことは難しいことであつて、無限に確かな教育を実現する意欲こそ大切でなければならぬまい。

その意味では、何カリキュラムといわないでも、例えば広島県本郷町の如き、徐々たる実態研究から、緩慢なカリキュラム研究と実践を進めている所がまだ多くあることも注目しておく必要がある。何が現実を押しすすめるか。現実に関係のないものの盛衰記はつまらないのである。まだ何がどうなっているかは明らかでないから、やっばり盛衰記は書けなかったというわけである。